The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「おだやかな死」を再考する
Author(s)	前原, なおみ
Citation	メタフュシカ. 2013, 44, p. 67-80
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26535
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「おだやかな死」を再考する

前原なおみ

はじめに

「老い」や「死」は、不可逆的に進行する不可避の現象である。すべての人は、生まれた瞬間から、老いながら死に向かって生きている。しかし、「老い」と「死」は混同して認知されることも多く、老いること、死ぬことについて理解して生きている者は少ない。

「老い」は、身体的な衰退、社会的な離脱または縮小を意味し、その一方で、精神的な成熟を期待され、英知によって人生を統合するという多義的な概念が持たれている。このような概念は、社会が高齢者に求めている姿であり、それは多くの人々が「老い」や「死」と向き合うことを困難にし、その過程を口外することを避ける要因となっている。ボーヴォワールは、その著書『老い』の中で、「老いは人間存在の必然的な帰結ではない。しかし、一定数の年月のあとで人間の肉体が退化をこうむることは経験的・普遍的事実である」（老、635）とし、しかし、「社会にとって、老いはいわばひとつの恥部であり、それについて語ることは不謹慎なのである」（老、6）と明記している。時代や国が変化しても、「老い」の概念に変化は見られていない。

医療の現場で身近に感じていることは、「老い」や「死」へのプロセスが変わってきていることである。これまで、老いによる機能低下や障がいは、病気と同様に扱われ、終末期になっても医療に依存する傾向があったが、高齢者の急激な増加とともに、延命を目的とした医療から部分的に解放され、また、この過程が語り始められている。

延命治療は、医療技術が進歩したことに端を発し、回復の見込みがない者に人工呼吸、人工栄養、人工透析などを用いて生存期間を延長させる措置を行うことである。その措置は、「老いて死ぬ」という概念を変化させ、自然死から、安楽死、尊厳死といった経過を経て、今日、平穏死という考え方へと変化してきた。平穏死とは、文字通り「人間として変わったこともなく、おだやかに死を迎えること」であり、尊厳死との違いは、意思決定ができない認知機能等が低下した高齢者も対象となる点である。おだやかに死を迎えることは、身体機能や認知機能が低下し、自己決定が困難となった高齢者や、複数の疾患や機能障害を持つ高齢者の「看取り医療」の考え方

として普及し始めている。

「おだやかな死」とは。

人は、加齢とともに心身の機能が低下し、生活の中で自身の衰弱を感じつつ、次第に生活上に不具合が生じ、葛藤と受容を繰り返しながら「老い」を自覚する。そして、それらの現象が頻繁に、かつ連続して起こった時に「死」の自覚へとつながっていく。一般に、「おだやかな死」とは、そういう一連の過程を経て、大往生と呼ばれるような自然な死がイメージされ、「その人らしい幕引き」や「苦痛や不安を感じることのない死」、また近年では「徒な延命治療の無い人間らしい死」などが表わされていることが多い。

しかし、ボーヴォワールの著書『おだやかな死（UNE MORT TRÈS DOUCE）』は、明らかにおだやかな死のイメージと相違する。

その内容は、癌で死んでいく母親と、娘ボーヴォワールの 6 週間の身辺記録であり、その終章に書かれている通り、スピリチュアルなものや、宗教的なものは排除して描かれ、著者は、1964 年にこの作品にレシ（話・語り・ある事件について語ること）と言う呼称を与えている。つまり、『おだやかな死』は、娘の立場から、母親の「老い」と「死」の一連の状況や行動について、現象に即して描かれたものである。しかし、その題名とは異なり、母親は、娘にとって「猶予を与えられた死骸」であり、最期の最後まで、「生きる！生きる！」と「生」に執着して生きている。モルヒネでさえも取りきれない痛みの中で、生きる希望と不安・恐怖に苛まれながら、最期を迎える母親と、その母への愛憎の気持ちに葛藤する娘の闘病生活が描かれており、今日の平穏死のイメージとは、明らかな相違が見られる。

そこで、本論文では、母親が亡くなるまでのプロセスを、母娘が葛藤している内容ごとに章立てして抜き出し、母親の視点（1 人称）と、娘の視点（2 人称）にわけてその変化を追う。さらにボーヴォワールの著書『老い』から意味づけを行うことで、「おだやかな死」の再考を試みる。なお、本論文では、『おだやかな死』からの引用を（死、ページ数）、『老い』からの引用を（老、ページ数）で表記した。

1．序章（～ 1963 年 10 月 24 日　転倒する以前）

1）1 人称の老い

【ある日】 母は怒気を含んだ声でこう言い返したことがある。「知っていますよ。私がおばあさんだということは。私にはあんまり愉快なことではありませんよ。ひとから思い出させてもらいたくないですね」（死、20）

【5 週間前】 腰の関節の痛みが、年ごとに悪くなり、団地の一角を一廻りするのに一時間もかかるありさまだった。1 日にアスピリンを 6 服飲んでも痛みがひどくて、眠れなかった。かかりつけの医者が、「何も心配なことはありません。いくらか肝臓機能に障害があるのと、腸の働きが鈍っているだけ」といったその日、「もうだめだという気がする」（死、9）

【最近】 彼女のもっとも切なる願いのひとつを満足させることができた。旅行がしたいという

願いを。……汽車に乗るのに車掌の手を借りて引っ張り上げてもらうことさえも躊躇しなかった。つい最近も、姪が小型車で 450 キロ以上も走らせ、メイニャックにつれて行った。母は花のようにみずみずしく元気で車から降りたった。（死、22）

くり返して見る悪夢を妹に語ったことがあるという。「誰かに追っかけられるんだよ。私は走って、走って、塀に突き当たる。その塀をとびこさなければならない。塀の向こうに何があるか、それがわからない。私は恐ろしい。」それからまたもこうも言った。「死そのものはこわくないのだけれど、とぶのがこわい。」（死、16）

77 歳の母親は、「老い」を否定しているが、身体的な変化は確実に訪れており、生活はすでに「老い」の現象に侵されている。転倒の 5 週間前には、腰の痛みによって「もうだめだという気がする」という言葉が聞かれているが、その後も妹の家に滞在し、みずみずしく生きており、「老い」はそばにあるが、母親のものではない。

しかし、一方では「死そのものは怖くないが、とぶことが怖い」とたびたび語っていることから、「老い」や「死」への恐怖は、内なる精神に常在している。それらは、母親にとって理解不可能な現実味のないものであるため、追いかけられる感覚を味わい、味わっているからこそ母親は自立と自律を規範とする生活を営んでいる。

ボーヴォワールは、「老いの受容、老いをわが身に引き受けることが、特に困難なのは、われわれがつねに老いを自分とは関係のない異質のものとみなしてきたからなのだ。私の中で年取っているのは、他者であり、しかもこの他者は、私なのだ」（老、334）と、老いを自分の身に置き換えることの困難さを記している。母親自身は老人ではなく、その存在は「若くないもの」であり、「老い」と「死」そのものから遠ざかった存在である。

２）２人称の老い

【5 週間前】 2、3 年前からいつ見ても、目の周りのくまが目立ち、鼻がとがって、頬が落ち込んでいた。モスクワから帰った折、いつものように、母の顔色は悪かった。今はもう、誰をも欺けなかった。確かに 77 歳の老婆であり、衰えきっていた。（死、8）

その日、母が、「もうだめだという気がする」といったのに、私は、驚きはしなかった。私として辛かったのは、母が今年は楽しくない一夏を送ってしまったということだった。（死、9）

娘は、母親が 77 歳であることを認識している。また、母親が、組織の悪しき変化によって老婆の様相を示している姿を直視している。しかし、それは「いつものように」であり、そこに「老い」は存在しない。したがって「だめだという気がする」という発言について、驚きもしなければ関心も示していない。「いつものように」なのである。

ボーヴォワールは、「われわれは近親者を永遠の相の下に見ているので、彼らの老いを発見することもまたわれわれに衝撃をあたえる」（老、340）と近親者の老いに気づくことの困難性とその衝撃を記している。母親の老いは、近くにあっても発見することは困難で、かつ娘は「老い」

の衝撃を回避するために感情を手放し、母親が老いることともに、自分が老いていくことへの準備を放棄している。

２．始まりの章（1963 年 10 月 24 日～ 10 月 27 日）

１）１人称の始まり

【当日】「手術はしなくてもいい。3 か月安静にしていれば、折れた個所がくっつくであろう」。母は、ホッとした様子だった。（死、11）

【2 日目】母の口辺は一層ゆがみ、もの言いが苦しげだった。少し眠そうな声で母は、私に、雑用をしてくれる附添いが肉を切ってくれたり、食事の時に手をかしてくれるし、食事はすばらしい、と言った。（死、14）

「母は天国を信じていた。しかし、老齢と、病気と不快にもかかわらず、かたくなに地上にしがみついていた。死に対して動物的な恐怖を抱いていた。」転倒して、床の上を這いまわっている間、「いよいよとぶ時が来たと思った。」（死、16）

【4 日目】母はまだ目を半ばとじ、記憶は眠っている。言葉はポツリポツリと口から洩れた。（死、19）

母親は、転倒後に、死に面した心境を「いよいよ飛ぶ時が来たと思った」と語っている。転倒によって身体には急激な変化が見られているが、その原因である「老い」は漫然と漂ったままで母親は気付いていない。しかし、転倒によって、これまでかたくなに拒否してきた他人からの援助を受け、それを喜ぶ言動も見られることから、「老い」からの生活変化は始まっている。

ボーヴォワールは、「すべての人間の状況は、その外部性においてと、その内部性において、すなわち主体がそれを乗り越えつつ身に引き受ける様態において考察することができる」（老、16）とし、さらに「老いは静止状態の事実ではなく、ある推移の到達点であり、その継続である」（老、17）と述べている。転倒は、母親に継続して援助される身体をもたらし、母親は「老い」を身に引き受け、他者から援助される存在へと到達させた。

２）２人称の始まり

【当日】1963 年 10 月 24 日木曜日、午後 4 時、私はローマにいた。ミネルヴァ･ホテルの自室に。知人がパリから電話で私を呼び出したのだ。「お母さんがけがをされました。」とっさに、私は、車にはねられたのだ、と考えた。しかし、「浴室でころんで、大腿骨が折れたのです」知人はそういった。（死、7）

心臓の状態は申し分ないし、血圧も若い婦人並みだった。母の身に骨折などと言う事故が起ころうとは夢にも考えないことだった。（死、10）

しかし、医師が言うように 3 か月で元通りになるということには疑問を持っていた。大腿骨骨折は、それだけなら、大したことはない。しかし、長期間からだを動かさずにいると床ずれが起きるし、それは、老人の場合、なかなか直らない。ねたままという体位のために肺に圧力がかかる。病人は肺炎を起こして、それで死ぬことがある。私はそれほど動揺しなかった。病気とはい

え、母は根が丈夫だった。それに、何と言っても、年に不足はないと言わなければならない年だった。（死、12）

【4 日目】改めて母はその「十字架の道」を私に描いて見せた。（死、19）

娘にとって、事の始まりは、何事もない日常に入った 1 本の電話であった。以前より母親の「老い」は、客観的事実を持って母親の生活を侵食しており、さまざまな生活リスクが予測できる状況であるにも関わらず、転倒は「夢にも考えていないこと」であり、突然、不運にも起こった事故と捉えている。

さらに、娘は「手術をしなくて良い」という事実よりも、「3 か月安静」という事象に対し、「老い」に伴う 1 次的変化と、さらに加わるであろう 2 次的変化から、死につながる可能性を予測している。しかし、「病気とはいえ、母は根が丈夫だった」と根拠の不明確な捉えなおしが行われ、さらに、77 歳という年齢に対して「不足はない」と気持ちは二転三転している。娘は、「老い」や「死」についての知識はあるが、母親の中にそれを認めることができず、それらに対する考察は行われていない。

ボーヴォワールは、「老人の社会への埒外への追放を、われわれは極端に押し進める結果、われわれはやがてそうなるだろうところの老人のなかに自分を認めることを拒否するのである。彼らの多くの者は老人となる、しかしこの転身をあらかじめ考える者はほとんどいない。これほど予期されてしかるべきものはないのに」（老、9）と記している。娘は母親の状態を「十字架の道」としてとらえ、「老い」や「死」が不可避な現象であることに暗雲を感じているが、この段階では主観的には認めていない。ここでも「老い」や「死」は、拒否すべき、予測できない変化であり、母親の転倒が変化の始まりであることに気が付いていない。

３．実感の章（10 月 28 日～ 11 月 5 日）

１）１人称の実感

【6 日目】枕によりかかって、じっと私の目を見すえたと思うと、きっぱりこう言った。「私はやりすぎたよ、ねえ、疲れてしまった。もうだめです。自分で年を取ったと認めたくない、それで通したのだけれどね。物事を正面からはっきり見る力を持たなくちゃね。あと何日かで私は七十八になりますよ。七十八と言えば大変な年さ。それに善処しなくてはね。生活を改めますよ。」突然母は、自分の七十八という年に、決然と、はっきりとした頭で、真正面から挑む力を見つけたのである。（死、20）

寝巻の前が開け、母は平気で、小さな皺が一面にきざまれたしなびた下腹部を人目にさらした。毛の抜けてしまった恥部。「ちっとも恥ずかしいという気持がないよ、私は。」と、母は驚いたような様子で言った。（死、23）

【7 ～ 10 日】私は母にきいてみた。「退屈なことはありませんか？」「とんでもない！」母はひとから身の廻りの世話をして貰う楽しさを、手厚く扱われ、着飾らせて貰う楽しさを、発見していた。（死、29）

【11 日】いくらか残念そうに、しかしまたいくらかいい気味だと言わんばかりに、母は私にこう言った。「町内では、私の顔が見られなくなって、残念がるだろうね。サークルのみなさんは、私のいない不便さを味わうだろうさ。」（死、30）

ひとつだけ気がかりなことがある。「ひとりで身じまいができなくなるだろうね。」（死、30）

母親は、他者から援助される存在であることをさらに受容し、羞恥心を損ねるほどに「老い」に嵌っている。これまでの人間関係を語ることで、自己の有用性を娘に証明しながら、自立と自律を規範とする生活から離脱している。ここでの「老いに真正面から挑む」とは、健康の衰退に適応し、自分が年を取ったと認め、役割を直視する力を持つことであり、身体機能にあわせて援助される生活を受け入れることであろう。

ボーヴォワールは、「老いは言い訳をあたえてくれ、自分に対する要請を少なくすることが許されるから、老いに身を任せた方がそれを否認するよりも楽なのだ」（老、337）と、記している。入院の直接原因となったのは、転倒という事故であったが、母親は娘に高らかに「老い」を宣言し、その人生を修正することを言葉にしている。また、「ひとりで身じまいができなくなるだろう」ことを心配しながら、すでに援助されることに抗う様子はない。転倒による身体の変化は、母親の生活を変化させ、母親は「老い」に言い訳を与えられ、身を任せている。

２）２人称の実感

【6 日目】毛の抜けた恥部をみられてもはずかしい気がしないと言う母に対し、「それでいいのよ、お母さん。」と言った。しかし、私は目をそらし、庭を眺めることに専心した。（死、23）

母は、生涯彼女を抑圧した各種の禁止事項や守則を断念していた。この肉体は突如として、この辞職によって、ただの物体にすぎないものに還元され、もはや、生命のぬけがらと殆んどことならないものになった。無防備の哀れな残骸、職業的な手で、さわられ、いじくり廻される物体、その中には生命が、ただ麻痺した無力状態で延長されているに過ぎないとしか思われない。初めて、母の中に私はしばしの猶予を与えられた死骸を見た。（死、24）

【7 日目】事故は母をその生活の枠から、彼女の役割から、私が母をその中に押し込めていた固定した影像から、引き離した。病床に横たわっているこの老女の中に私は母を認めたが、母が私のうちにひきおこさせた一種の狼狽と憐憫はあまりにも意外だった。（死、25）

【10 日目】私は毎朝見舞いに行き、1 時間か 2 時間しか枕もとにいなかった。病人がそれ以上私をひきとめておくことを望まなかったのである。（死、28）

【13 日目】癌。漠然とその不安はあった。いや、それどころか、歴然としている。目のまわりのくまを、あのただごとではないやせ方を、見ればいやでもわかる。しかし、主治医はこの仮定を退けていた。それに、わかりきったことではないか。親たちは息子が気狂いであることを認める最後の人間であり、母親が癌だということを子供たちは最後まで信じようとしない。（死、33）

娘は、母親の「老い」の宣言と羞恥心の衰退から、母親を「無防備の哀れな残骸」と感じてい

る。「その老女」である「病人」の中に母を認めつつ、自立できない母親を「しばしの猶予を与えられた死骸」と捉え直し、母親は「老い」「死」を超越した存在になっている。

ボーヴォワールは、「生きる意義を追求するには、個人、共同体、公共福祉などへの献身でもよいし、社会的あるいは政治的な仕事、知的、創造的な仕事でもよい。われわれは老いても強い情熱をもち続けるべきである」（老、637）と記している。これまで、生きることに積極的で、自分に課している不自由と強制とに対して反抗して「生きて」いた母親が、「自分自身のためだけ」に生きる宣言をした時から、娘の中で母親の「生」は崩壊している。娘の気持ちは変容し、母親をすでに生きざる者としてその存在を否定することで、新たな関係が始まっている。

４．解離の章（11 月 6 日～ 11 月 17 日）

１）１人称の解離

【14 日目】母は、喉が渇くけれど、飲んではいけないのである。母は唇をうるおすが、呑み込みはしない。この貪るような、そして同時に押さえに押さえた吸引運動、薄い生毛の生えた唇の行うこの運動に、私は呆然と見とれた。（死、36）

母は、手術室に移され、しばらくして N 博士がそこからでてきた。腹腔から 2 リットルの膿。腹膜破裂だ。巨大な腫瘍、最悪性の癌。（死、39）

【16 日目】自分ではまだ非常に弱っていると感じており、少しでも体力を使わないようにというのが母の最も強い願いである。「髪を切ってください。」「髪の手入れなんてからだが疲れるばかりです。切ってくださいったら。」妙に頑強に、母は言い張った。この犠牲によって決定的な休息をあがなおうとするかのように。（死、66）

【18 日目】「便器を使わずに、床の中へしてしまえばいいのよ。敷布はすぐとりかえます。面倒でなんかありません。」「そうよね。」と、母は言った。それから、眉をしかめ、顔に決意をうかべて、挑戦するように叫んだ。「死んだ人間は敷布の中にしているよ。」（死、76）

【19 日目】母はこうしてひとの世話になっていることを楽しみ、ひっきりなしに、私たちの注意をうながした。（死、80）

その日の午後はもう笑わなかった。驚きと非難をこめて何度もこう言った。「鏡を見たら、自分はあまりにもみっともないので！」（死、79）

母親の身体は肉腫に蝕まれ、「生」から離れつつある中で、精神は回復にのみ向かって生きている。自分の容姿を気にするほどに精神は回復しているにもかかわらず、身体の「死」との解離には気が付いていない。母親の身体は、精神を裏切って「死」に向かっており、しかしそれは、精神が身体を裏切って「生」に向かっていることでもある。

母親はこれまでの自立した生活に援助を受け入れ、自慢であった髪を切り、ついには体力を使わないために、排泄からも羞恥心を取り除いている。

ボーヴォワールは、「老いのイメージの中に、自分を認めるように内部からわれわれを強制するものは何一つない。であるから、言葉のうえでこのイメージを忌避することができるし、また

行動によってそれを拒否することもできるのだ、なぜなら、拒否はそれ自身、引き受けの一つの形式なのであるから」（老、347）と記している。「死」への拒否によって母親の見せる行動は、内部から何も強制されておらず、拒否自体が、母親の「老い」や「死」の引き受けの形となっている。

また、「精神と肉体とは緊密な相関関係にある。悪い状態に変化した肉体を外界にふたたび適応させるための仕事を為しとげるには、生きることへの意欲が保持されていなくてはならない。多くの場合､肉体と精神は相たずさえて『それらの成長あるいは凋落に向かって』進むのである。しかし、つねにそうであるとはかぎらない。精神が肉体的老化に抵抗し、やがてそれに押し流されてしまうこともある。そのとき老人は、自己への不適合とも称しうるものを悲劇的に経験する」（老、372）と記している。母親の身体と精神の解離は、不適合であり悲劇的な受容の形である。

２）２人称の解離

【14 日目】突然、夜の十一時頃、どっと涙があふれて来た。それは殆んど神経的な発作に変った。私の絶望は私の制御を逸脱した。私の中で私とちがう誰かが泣いている。母の全人格、母の全存在が、物としてそこに現れており、母の苦しみを一緒に苦しむことが私を引き裂いた。（死、41）

【15 日目】私はタクシーを止めた。同じ道筋、空気の青い生暖かい同じ秋。しかし、私は、別の物語の中にはいったのだ。病後の回復期の代わりに、死に至る苦しみ。（死、60）

彼女の思いで、願望、気がかりが、非現実な夢に転形し、死が目前に迫っていることと母の声の子供っぽいことのために一層胸をえぐるものになって時間の外に漂っていた。（死、63）

【16 日目】その日、私たちを感動させたのは、母がどんな小さな快感にも敏感だったことだ。恰も七十八という高齢で、新しく生きる奇蹟にめざめたかのように。（死、69）

（妹）こんな風に母さんが、何日か幸福な時間を持つとすれば、命をのばしてもらった甲斐があるのじゃないかしら｣。しかし、その代償はなんだろうか。（死、70）

【18 日目】母の裸がはばかられるというようなことはもうなかった。それはもはや母ではなく、苦しんでいるあわれなひとつの肉体だったから。それでも私は何かおそろしい神秘にけおされて怖気づいていた。別にはっきりそのものの姿を思い浮べられるわけではなく、ぼんやりと私の感じているものだった。（死、74）

【19 日目】わたしもまた癌にむしばまれていた。後悔と言う癌に。「手術はしてはいけない」だのに私は何の手も打たなかった。社会通念に負けて、私は自分自身の道徳律を否認したのだ。病人は専門家たちの所有物になった。（死、80）

母は、私たちが自分のそばにいると思い込んでいる。しかし、私たちはすでに彼女の人生の反対側に位置しているのだ。母はずっと遠いところで、人間的孤独の中でもがいている。私のものではあるが、私の責任ではない過誤。私が永久に償うことのできない過誤。（死、82）

母親は、自分の「生」に執着しており、娘の思いに気持ちを馳せることを辞めている。他者への配慮を忘れなかった母親が、身近に世話をしている娘の気持ちを気にすることなく、子どもの

ように無邪気に「生」に執着する様は、愛憎を抱えながら世話する娘の気持ちを解離させている。

娘の願う「生」と、あまりにもかけ離れた母親の「生」の在り方から、娘は、母親を「専門家たちの所有物」と感じ、生きていることそのものに疑問を抱いている。それは、母親の生きたいという気持ちとの解離であり、また、娘の信念との解離という 2 重構造となり、自分の中に「私と違う誰か」を感じている。

ボーヴォワールは、「われわれはいぜんとして自分自身であるという心のなかの確信と、われわれの変身という客観的に確実な事柄とのあいだには越えがたい矛盾が存在する。われわれはこの二つのあいだを往ったり来たりするだけで、両方をいっしょにしっかりと把握することはけっしてできないのである」（老、342）とし、「それはわれわれの状況の裏側をあらわすものだから」（老、342）と記している。娘は、母親の全人格を受け入れ、一緒に苦しむことで引き裂かれ、「死骸」であり「母」であることの矛盾に直面して気持ちの解離が起こっている。

５．終わりの章（11 月 18 日～ 12 月 2 日）

１）１人称の終わり

【26 日目】傷口は瘻管を作ってしまい、そこから、腸の内容物が排出されていた。分析の結果によれば、腫瘍は非常に毒性の強い肉腫だった。体中に転移が始まっていた。（死、90）

【28 日目】「ああ、ほんとに疲れた。」と、病人は何度も溜息をついた。昼飯は食べなかった。（死、94）

母は、うさんくさそうに、切なそうに、面会者の顔をじっとみつめた。「私がもう一度お宅を訪ねられるようになると思いますか？」母の顔の上にこれほどの歎きの色が浮かんだのを今までに見たことがなかった。その日、母は、もう助からないことを察したのだ。（死、94）

【31 日目】食事と食事の間に、新鮮な果物の汁の調合したものをちびりちびり飲む。「ヴィタミンだから、私にいいよね。」（死、105）

ピペットでききめがあると思われるさまざまなヴィタミン薬を吸い込む。死肉を食う魔女の口が貪るように生命を吸い込んでいる。（死、113）

【40 日目】「いったい何時なの？わからなくなっちまった。もう夜なのかね！」（死、122）

床ずれが直るまでたくさん眠らせるようにするのだと説明すると「しかし、私は命を無駄にすることになる。」母は非難をこめてこういった。（死、123）

「今日は生きなかった」「心配なのは、万事どうでもいいという気になることだよ。」（死、123）

【41 日目】私はね、もうわからなくなったよ。誰に限らず、ヒトを愛しているかどうか。（死、125）

「のけといてもらわなくちゃ……ラ・モール（死）を」。モール（死）という言葉にひどく力を入れ、母はこう附け加えた。「死にたくない。」（死、130）

けいれんとともに病人は昏睡に落ちた。彼女は、座って、息をしていた。目はどんよりと何も見ていなかった。そして、それでおしまいだった。（死、130）

母親の身体はさらに悪化し、肉腫の転移と瘻管によって、生命体としての生理的な秩序は破綻している。臀部の床ずれにより、やけどのような強烈な痛みを伴い、モルヒネも効かない状況で

あるが、身体にいいものを積極的にとり、寝て過ごした一日に対して「いのちを無駄にしている」と非難していることから、精神はいまだ「生」を目指している。

ボーヴォワールは、「生きてあること、それは人間存在にとっては、己れを時間化することである。すなわち、現在において、われわれはわれわれの過去を乗り越える投企によって未来を志向する、人は、老人を次のように定義しうるだろう、自分の背後に長い人生をもち、前方にはきわめて限られた存続の希望しかもたない者である」（老、427）と記している。母親は、残された時間によって未来を志向し、存続のみを切に希望している。

しかし、一方で、食事を食べない機会があり、「わからない」「万事どうでもいい」という気持ちが見られ始め、「生」に執着する言動は変化しはじめている。身体と精神は徐々に統合され、「死にたくない」ということで、「生きる」選択をしながら母親は本当の終わりを迎えている。

２）２人称の終わり

【26 日目】私は母の死に目に会うことを特別に固執してはいなかった。しかし、母がこれきり私に会わないと思うことは耐えられなかった。

ないといえば、つぐないの道もまたない。私は自分自身のために骨身にしみて、これから死ぬひとの最後の時に、ひとは絶対的なものを込めることができることを理解した。（死、89）

【28 日目】母はつぶやいた。「じゃ、私の容態は悪いんだね。」もう一度、私は腹を立てる振りをしてみせた。「母さんがききわけがないから、私はいるんですよ。」我ながら理不尽なきびしさをつくったことが私には切なかった。真実が病人を圧倒している時に、言葉でもってそれから解放されたいという欲求を病人が感じているに違いない時に、私たちは、母を沈黙に追いやっているのだった。不安をかくして言わないように、疑いをおしころすように強いている。しかし、私たちには選択権はなかった。希望を持つことが彼女の必要の第一のものだ。（死、95）

【31 日目】母から生ける屍への移行は決定的に完了していた。ほとんどの生活は母のそばで行われており、その目的はただひとつ、病人を守る事。（死、105）

何よりも私たちを苦しめたのは、母の危篤状態の苦しみであり、また恢復であり、私たち自身の矛盾した気持だった。苦しみと死とのかけくらの中に身をおいて、私たちは死の方が先にゴールに入ってくれることを熱心に望んだ。最後のけいれんが起こりはしないかという恐怖が私たちの胸をしめつけた。（死 109）

私はどこへ行っても自分が喜劇の舞台のひとのような印象を受けた。世界が変装するように私には思われる。（死、108）

【33 日目】その晩、死んでいる母を想像して気がてんとうした。（死、110）

【39 日目】辛い仕事である。死ぬことは。生をこんなに愛している時は。（死、116）

母は何と孤独だったことか。私は母の体にさわり、話しかけた。しかし、母の苦悩の中に入り込むこことは不可能だった。（死、119）

娘は、母親の手術に同意したことを永久に償うことのできない過誤と自覚し、病人を絶望から

守ることを決意しており、母親がのぞむとおり「死」を近づけないことに細心の注意を払っている。そのため、娘の生活は、母親との密着した生活へと一変し、徐々に母親の視点と自分の視点が混同され、生活そのものが縮小している。また、絶望から守るために母親を沈黙と孤独に追いやり、そのことは、結果的に娘自身を沈黙と孤独に追いやることになっている。

娘の中で、母から生ける屍への移行は完了し、その存在に求めているものは「死」である。そのため、母親の「生」に怯え、「死」が到着するのをひたすら待っているが、母親の死を想像することで気が動転していることから、母親の死を想像することはタブーな状況である。したがって、母親は最期まで、その「生」の希望の内に存在し、「死」とは切り離された存在となっている。

６．死の章（1963 年 12 月 3 日以降、pp.128-131,146,148）

１）２人称の死

期待していたこと、そして納得できないこと、これほどまでに。母の代わりに寝台に横たわっているこの死骸は。母の手も額もつめたかった。それでも、それはまだ母だった。そして、永遠に母の不在だった。（死、128）

母の意志は知っているつもりであり、それに従った行動をとった。（死、146）

「たったひとつの慰めは、私もいつかこうなるってことだわ。さもなければ、あんまりひどすぎる！」と、妹は、私に言った。その通り。私たちは自分自身の埋葬の総稽古に立ち会っているのだった。不幸は、万人に共通のこの冒険を、各人が単独で生きるということである。（死、148）

誰か愛する者が死ぬと、私たちは胸を刺す無数の悔恨を支払って生き残る罪をつぐなう。そのひとの死はかけがえのないただひとつの存在であったことを私たちにあかす。（死、139）

娘にとって、母親が「無防備な哀れな残骸」に変化した 4 日目から、母親に「老い」も「死」も近づけない努力をすることにより、娘は「老い」と「死」を総げい古に立ち会ったとして自分のこととして理解している。

「生」に執着する母親のありのままの姿によって、母親はその尊厳を取り戻し、娘は遺体にも「母」の存在を認めており、母親は死をもって、娘の中に生きづいている。母親の最期は、娘のすべてを占め、その存在は、娘の世界全体となっている。娘は、自分たちの存在は「母親の苦痛を軽減し、不安、恐怖と苦痛を相手に勝利した」と感じ、それは償いであったと感じ取っている。

娘は、母親の死の場面には立ち合っていない。「生」に執着することが「死」から隔てられている感覚を味わいながら、徐々に、何度も、確実に繰り返される母親の「生」から「死」の過程において、期待していた死がようやく到着したことを見つめ、受容し、しかし納得できずにいる。

母親は、最後まで、生涯おそれていた癌であることが心をかすめることもなく、心にもない「死の受容」の言葉を口にすることもせずに、「生」のまま存在し、「死」によって拷問のような苦しみから解放され、娘の中に母親として再び生きることができた。それは、娘にとって、母親の「死」という「生」の始まりであった。

7.「おだやかな死」について再考する

「母はいともおだやかな死を経過した。めぐまれたものの死を」（死、141）。物語はこう締め括られている。しかし、その締めくくりの直前に、「私は想像していた。瞳孔の開いた、くわっと見開いた母の眼にたたえられた恐怖を。」の一文がある。

医療者である私にとって、『おだやかな死』は、その題名から想像される平穏な死とは程遠く、身体的・精神的な加齢現象や病気の経過を理解しても解決できない問題であった。

「おだやかな」死とは。

ボーヴォワールは、「老人が、彼を人間の状態に突き落す経済的・生理的諸条件の犠牲とならないとき、彼は老化による変質を受けながらもかつてそうであった個人でありつづける、つまり彼の晩年は大部分彼の壮年期によって左右される」（老、594）とし、さらに、その老い方について、「しかしながら、内在的な公正〔たとえば、立派な人生を送った者は必然的に幸福な晩年で報われる、あるいはその逆〕が存在するわけではなく、実情はほど遠い。その人間の過去における選択と現在の偶発的出来事とが影響し合って、各人の老年期にその相貌をあたえる」（老、594）と記している。

つまり、ボーヴォワールの「おだやか」とは、母親が「老い」によるさまざまな変質を受けながらも、かつてそうであったように母親らしくありつづけることができたことであり、また、恐れるがゆえに「死」を直視することなく、母親の過去から現在における選択が認められ、かけがえのないただひとつの存在でありながら娘と最期を過ごせたことではなかったか。

人間の「死」は、身体的だけでなく、精神的・社会的な死でもあり、特に高齢者の場合は、尊厳の中で生きていくことが重要とされている。しかし、高齢者の終末期は、医療や介護を必要とするものの増加による費用の高騰と、マンパワーの不足問題が顕著であり、医療と介護の縮小に重点が置かれており、厚生労働省や日本医師会、日本老年医学会、日本透析医学会は、相次いで終末期医療のガイドラインを出し、患者の利益にならない医療は控えようという流れがある。

一方、高齢者には、往生際こそがその人の真価であり、積極的治療をしない、苦痛の無い、安らかな看取りを持って、高齢者が望む「死」という考え方も普及し始めている。それまでの人生に関わらず、高齢者はその死に方に、美しさ、立派さ、潔さを求められ、ありのままのその人でいることや、死を拒否すること自体が否定されてきている。そのような個人の考え方が反映されないまま「おだやかな死」へと方向づけることは、これまで同様に、老いが社会にとっての重荷であり、語ることは不謹慎であること、つまり禁じられた主題であることに他ならない。

終わりに

「老い」や「死」は、不可避であり、かつ進行する現象であるため、よりよく生きることやおだやかに人生の幕を閉じることはすべての人の願いである。しかし、その概念は、その人が所属する社会規範に規定されるため、その概念が社会や経済によって偏向する動きは避けられない。

ボーヴォワールの『おだやかな死』から言えることは、「老い」や「死」を迎える時に、「おだ

やか」であるということは、ただ安楽であることや他者に迷惑をかけないこと、または医療を中止することとは一致しない場合があるということであった。母親の死の過程は、安楽死にも、尊厳死にも、平穏死にも分類されない「生」に執着した生き方であったが、それが、母親らしい「おだやかな生」であり、それは娘にとって「おだやかな死」であった。高齢者には、長い歴史があり、老いや障害、疾病が複雑に絡みあうため、生き難さや逝きがたさは一律ではない。人がその終末期において一個の人間として存在し続けるためには、過去と現在の選択が認められ、かつてそうであったようにその人らしくありつづけ、生涯を通じて人間として扱われることが必要である。

「老い」や「死」の概念は、時代とともに変容するため、常に新しい問題である。高齢者が、あるがまま死にゆく姿を見せるのは、先に逝く者の責務であり、最後の大仕事であると言われているが、その姿は一様ではない。つまり、高齢者の「おだやかな死」を、平穏死という一義的な結論に導くのではなく、その個人の生きてきた過程、人間の基本的な在り方、こころの在りようの現象に焦点を当て、「おだやかな死」の意味を再考する必要がある。

（まえはらなおみ　大阪大学大学院文学研究科哲学講座・臨床哲学）

参考・引用文献

1）シモーヌ・ド・ボーヴォワール、杉捷夫訳：おだやかな死、紀伊国屋書店、1995
2）シモーヌ・ド・ボーヴォワール、朝吹三吉訳：老い（上下）、人文書院、1972
3）石飛幸三：『平穏死』のすすめ、講談社、2010
4）長尾和宏：「平穏死」10 の条件、ブックマン社、2012

Reconsidering “A Very Easy Death”

Naomi Maehara

“Aging” and “death” are inevitable phenomena that progress irreversibly. However, there are very few people who see “aging” and “death” as issues for themselves and understand what the end of life means. As we near becoming a super-aged society, the form of support the elderly people in their end-of-life care on the medical front has been changing. Developments in medical techniques and technologies have improved life-prolonging treatments. This leads those involved who have questioned the value of a comfortable and dignified death, to now look at the desire for peaceful death from a QOL view. However, our view of peaceful death is apparently different than that in UNE MORT TRÈS DOUCE, “A Very Easy Death” by Simone de Beauvoir. In this paper, the author reconsiders “A Very Easy Death” by viewing the mother’s death in the story from two viewpoints; the mother’s (first-person) and Simone de Beauvoir, the daughter’s (second-person). Beauvoir’s theory in “A Very Easy Death” is that her mother could maintain continuity in her life despite the fact that she had gone through various transformations from “aging” and “illness”. She was the one who made choices, allowing her to be the one and only determinate person of her life and death. Because the concept of “aging” occasionally changes, it remains fresh, even today. It is the responsibility of people who pass away ahead of others to handle their deaths in an “as it is” manner, not only their final but perhaps most important act. However, the handling of death is not uniform. Thus, we should not interpret “A Very Easy Death” to be an unambiguous handling of peaceful death, but reconsider the meaning of it focusing on phenomena that includes the process of how that individual lived, what the basic way of being is, and how our minds respond.

「キーワード」
老い、終末期、ボーヴォワール、平穏死、高齢者